

プーランクが北極星に 感じられたひと夏の想いで

2023年10月30日
23期 常任幹事 畑地 豊



梅雨が明けるころの7月16日 猪名川町に在住の娘宅を訪問することになって
いた。

事務局長の前田さんも至近の距離内にお住まいであることから、これまでも
ついでと言っては失礼なことながら、何度か情報交換、親交増大の目的でお茶を
したことがあった。日生中央駅前に阪急オアシスという大きな店舗があり、この中
のオープンカフェを利用していた。

簡便で容易に利用できるのも面倒が無かったが、今回はいわゆる普通の落ち着いた
店を利用したいと思っていたので、事前に店舗チェックを始めていたところ、電話
があり「今日は普通の喫茶店で合流することにしよう！」と案内があった。以心伝
心とはこのことか！ 地元の主からその店舗の指示があった。

「カフェ・プーランク」聞くからに“怪僧”を連想させるような怪しげな名前では
ないか！

しかし私はオープンカフェスタイルよりも普通の落ち
着いた茶店の方が好みであるので、二つ返事で承諾を
した。

日生中央駅からほど近いところにその店があった。
店内に入ると先ず真っ先に立派なグランドピアノが
目に入った。プーランクは怪僧ラスプーチンでは
無く作曲家のそれかと、ここで鈍い頭も漸く合点
がいった。

どうやら音楽家や音楽愛好家が好んで集う店のよう
に感じた。



午後の2時頃だったのでゆったりした雰囲気配置されているテーブルには先客の少年（高校生か）2人が陣取っていた。私達は入りロドアに近いその隣に腰を落とすことにした。

前田さんはこの店のマスターに会うという目的も有ったようであった。

私との会合も考えると一石二鳥、一挙両得ではないか、今にして気がついたわけでは無いが頭の良い人だ。

フーランク お店の外観



店内 グランドピアノ

前田さんとマスターが本題のことで一言二言会話を交わしたときに「北辰会」という言葉が飛び出していた。その時である、臨席で食事をしていた先客の少年たちの耳が“ピクッ”と動いたのを私は見逃さなかった。そして同時に二人は臨席のわたしには聞き取れない程度の二人の間でひそひそと情報交換している会話が状況として認識出来た。

「北辰会」知っているのか！しかし2009年に閉課程しているのに、現在こんな若い定時制の生徒が存在するはずが無いではないか！とすると彼らは全日制の生徒で、北辰会の記念碑を見た記憶が鮮明に頭に入っていたのか！ そうだとすればさすが北野の生徒はやはり学業と同様思考回路も優秀ではないか！

鈍い頭で有るが私の頭脳は瞬時に回転して答えを導き出そうとしていた。

彼らは茨木市内在住で正真正銘「北野高校」の1年生であるという。私は高槻市在住だからいわば隣町である。どこかですれ違っている可能性も無いことでは無い。今日は近くの「能勢の妙見山」にハイキングで訪れ、帰路この日生中央駅にたどり着き昼食休憩でこの店にふらりと入って来たとのことであった。



この店のマスター「佐々木信明」氏は、元北野高校の音楽科・教諭でいらっしやっただとのこと。かって定時制課程が「閉課程」を迎えるに当たり記念ビデオ作成のため、校歌「ゆうべの星」CD制作に際し、佐々木先生に全面的ご協力をいただき録音収録が実現したとのことであった。

2012年7月の録音当日は、北野高校音楽教室に全日制在校生男女計16名、北辰会男女計14名総勢30名で、佐々木先生が事前に録音されたピアノ伴奏で無事録音が完成したとのことであった。

この店の常連で先客の中村さんも北野のOBであるということで、みんなで自己紹介と言うことになった。あっという間に「北野人」の集いとなった。



【後列左から】 マスターの佐々木さん 北野高校1年(138期) 北野高校OB(84期)中村さん
宮坂くん
桑岡くん

【前列左から】 前田さん、 畑地(筆者)

現役の両人が本日お参りがてらハイキングで立ち寄った「能勢の妙見山」は北極星信仰の世界的聖地であり日蓮宗霊場寺院「能勢妙見山」である。

北極星である「北辰」の結びつきとしては、最高の集いが完成し、強いご縁を感じる事となった。

能勢妙見山・本堂

山門



PHOTO: ネットより借用



PHOTO: Wikipediaより借用

若いお二人に「雲外蒼天」の話をして差し上げた。21年4月/始業式の時、天野校長先生から「雲外蒼天」を交えてお話がなされたが、このことをホームページで拝読した北辰会29期の竹本大鶴さん（書家）がすごく感動してこれを揮毫して額装し、校長室にご寄贈させて頂いているので、校長室を訪ねて是非とも鑑賞させて頂いて下さいと紹介しておいた。



うんがいそうてん
雲外蒼天の意味

文字通りの意味は、

〈 雲を突き抜けたその先には、青空が広がっている 〉

転じて、 〈 努力して苦しみを乗り越えれば、素晴らしい

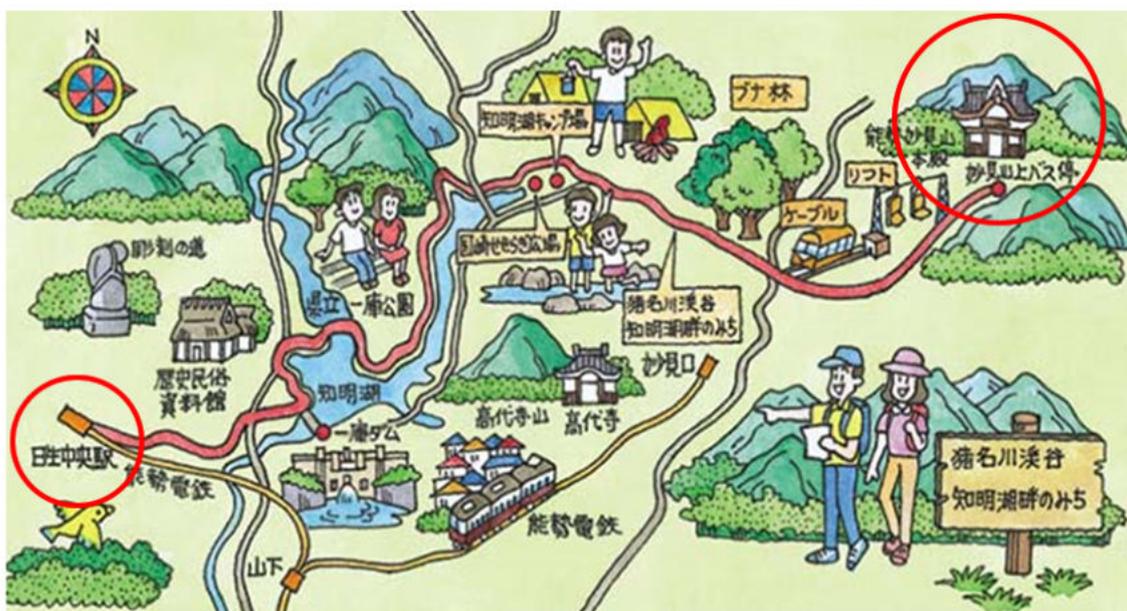
世界が待っている 〉 といったことを指して使われます。

2021（令和3年）6月吉日 竹本大鶴

このような**運命**的な出会いが有り、
これだけ**驚愕**したことはついぞ
なかったひと夏の経験でした。

（参考情報）

運命 ベートベン 交響曲第 5 番
驚愕 ハイドン 交響曲第94番



「ひょうごの環境」HPより <https://www.kankyo.pref.hyogo.lg.jp/jp>